

緒言

土屋弘行

Hiroyuki TSUCHIYA

金沢大学大学院
医薬保健学総合研究科・
医薬保健学域医学類機能
再建学(整形外科学)

本誌上シンポジウムは「脊椎腫瘍 最近の話題」と題して、この分野を代表する6名の先生方に執筆をお願いした。

日本大学の上井浩先生には「原発性脊椎腫瘍の治療における最近の進歩」と題して、特に治療の難しい骨巨細胞腫、脊索腫、動脈瘤様骨嚢腫についてまとめていただいた。原発性脊椎腫瘍は頻度が低いにもかかわらず、良性から悪性までさまざまな種類の腫瘍が存在し、さらにデノスマブの登場によりその治療はますます複雑化している。

神戸大学の角谷賢一朗先生には「転移性脊椎腫瘍の診断と治療戦略—骨転移 Cancer Board の活用」と題して執筆いただいた。転移性脊椎腫瘍の診断と治療においては、関係各科の医師だけでなく多職種の方々が協力し合って集学的診療を実践することが大切である。このような Cancer Board は今後さらに、全国に広がっていくであろう。

都立駒込病院の杉田守礼先生には「整形外科の立場からみた最近の放射線治療」と題して、整形外科医が知っておくべき放射線治療の基礎知識をまとめていただいた。放射線治療は放射線科医にすべてお任せではなく、われわれ整形外科医も積極的に関わっていくべきである。

川崎医科大学の中西一夫先生には「転移性脊椎腫瘍に対する最小侵襲脊椎安定術(MIST)の有用性」と題して、新しい低侵襲の治療法を紹介していただいた。転移性脊椎腫瘍患者のようながん患者にとって非常に有用な治療法であり、今後もますます適応が広がっていくであろう。

金沢大学の村上英樹先生には「転移性脊椎腫瘍に対する根治的手術の適応」と題して執筆いただいた。以前は脊椎転移に対する根治的手術はもつての外と認識されていた時代もあったが、がんの治療が急速に進歩し、生命予後が格段に改善してきた現在、根治的手術の必要性は言うまでもない。

静岡がんセンターの高橋満先生に「脊椎腫瘍の薬物治療」についてまとめていただいた。脊椎腫瘍の治療の基本は、手術療法よりも薬物治療と放射線療法の組み合わせである。特に骨修飾薬の登場により薬物治療は大きく発展してきている。

以上6名の先生方の論文には脊椎腫瘍の最新のトピックスが詰まっている。ぜひ、「がん診療が苦手な」整形外科医に読んでいただき、今後患者数の増加が予想されるこの領域で、整形外科医として積極的にがん診療に関わっていただきたい。